

入場無料・参加自由

立命館大学人文科学研究所研究プロジェクト「間文化現象学と人間性の回復」ワークショップ

荒川修作 + マドリン・ギンズの現在 : 哲学と創造性

日時：2019年11月21日（木）16:20～

場所：立命館大学衣笠キャンパス 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム

現代美術家で建築家の荒川修作(1936-2010)と、詩人のマドリン・ギンズ(1942-2014)は、共同で絵画、彫刻、詩作、映画などの制作に取り組み、その後建築の分野にまで活動を広げた。自分たちを芸術、科学、哲学を統合する実践者であるコーディネロジストCoordinologistと称し、身体と環境の関係を徹底的に変革する作業に取り組んだ。それは「建築する身体」「天命反転」といった独自の思想を提唱することで「死ななくなること」を目指した実践であった。本セッションは、荒川+ギンズ研究の現在について、哲学、メディア論、身体教育学、ダンス理論/実践の側面から議論するものである。

三村尚彦氏(関西大学文学部教授)

専門はフッサー現象学。最近、フォーカシング指向心理療法を提唱したユージン・ジェンドリンの体験過程理論と、そのつながりで荒川+ギンズの「建築する身体」の哲学的理解に取り組んでいる。

門林岳史氏(関西大学文学部准教授)

専門はメディアの哲学、映像理論。著書に『ホワッチャドゥーイン、マーシャル・マクルーハン?——感性論的メディア論』(NTT出版、2009年)、訳書にロージ・ブライドッティ『ポストヒューマン——新しい人文学に向けて』(監訳、フィルムアート社、2019年)などがある。

小室マイケル弘毅氏(関西大学人間健康学部准教授)

専門は教育学、身体(ソマティック)教育学。近代日本における「教養=自己形成」についての研究からスタートし、現在はヨガ、ボディワーク、身体心理療法、マインドフルネス等東西の身心技法を研究対象とし、からだどころの関係から人間形成の問題について探求している。近年は荒川思想の体験的理解について取り組んでいる。

木田真理子氏(立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程)

ダンサー。カナダ、スウェーデンでプロダンサーとして活動。その後プリンシパルダンサーとしてスウェーデン国立バレエに所属した。ブノワ賞(ロシア)、レオニード・マッシーニ賞(イタリア)、文化庁長官表彰(国際芸術部門)を受賞。2016年よりフリーランスとしてピナ・バウシュ・ヴッパタール舞踊団に客演するなど各国で活躍。現在、先端総合学術研究科でダンス研究に取り組んでいる。

主催：立命館大学人文科学研究所

重点研究プログラム「間文化現象学と暴力からの人間性の回復」(代表:加國尚志)

お問合せ：立命館大学人文科学研究所 Tel 075-465-8225 / E-Mail jinbun@st.ritsumeai.ac.jp

Follow us
on Twitter

